製作／東 映 株 式 会 社
東映動画株式会社

製作

東映株式会社

東映動画株式会社

製作

高岩淡

泊懋

企画

清水慎治

原作 水木しげる

講談社（コミックボンボン テレビマガジン たのしい幼稚園 おともだち）連載

脚本　島田満

❺

音楽
和田薫

作画監督

窪 秀巳

美術監督

松宮正純

製作担当

目黒　宏

監督　佐藤順一

原画

動画

トレスチーフ	カラーチーフ	ゼログラフ	特殊効果	仕上検査	背景

役職	氏名
監督助手	広嶋秀樹
製作進行	岡田将介
仕上進行	
美術進行	
記録	
プロデューサー補佐	有原美千代

撮影監督	撮影	編集	ネガ編集	録音	選曲	音響効果	現像	宣伝

【オープニング】

ゲゲゲの鬼太郎

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂　歌　団
（wea japan）

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
朝(あさ)は寝床(ねどこ)で　グーグーグー
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　学校(がっこう)もしけんも
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
昼(ひる)はのんびり　お散歩(さんぽ)だ
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　会社(かいしゃ)も仕事(しごと)も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
夜(よる)は墓場(はかば)で　運動会(うんどうかい)
たのしいな　たのしいな
おばけは　死(し)なない　病気(びょうき)も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

【エンディング】

カランコロンのうた

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂歌団
(wea japan)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
おばけがポストに　手紙(てがみ)を入(い)れりゃ
どこかで鬼太郎(きたろう)のゲタの音(おと)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ドッタンバッタ　ゴロゴロ
ギャアギャア　ギーギー　ドタドタ
どこかでおばけの　うめき声(ごえ)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ゲゲゲの鬼太郎(きたろう)　たたえる虫(むし)たち
どこかへ鬼太郎(きたろう)は　消(き)えて行(ゆ)く
カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン

登場キャラクター

役名	摘要	声の出演者
鬼太郎		松岡洋子
目玉のおやじ		田の中勇
ねずみ男		千葉繁
ねこ娘		西村ちなみ
砂かけ婆		山本圭子
子なき爺		塩屋浩三
一反木綿		龍田直樹
ぬりかべ		龍田直樹
○		
三太郎		
純		

光太		
洋		
ブータレーズ選手たち		
ファイアーズ選手たち		
○		
球妖怪	（審判）	
小豆とぎ		
小豆はかり		
輪入道		
畑怨霊		
雨降り小僧		
風神		
雷神		

化け草履

傘化け

○

その他

1

墓

荒涼とした風が吹き抜けている。

赤黒くただれた夕焼け。

スコップをふるい、墓を暴いている男のシルエット。狂気にとりつかれたように、掘り続けている。

鬼太郎の声「昔……。その男は名の知れた野球選手だった。あるときからスランプにおちいって、全く打てなくなってしまい……死ぬほど焦っていたんだ。そんなとき、あるバットの噂を聞いた……」

スコップが何か固いものに当たった。

墓のなかから棺桶が現れた。

骸骨がバットを抱いていた。

男の目がギラギラ輝く。

男のシルエット「これだ!! 思いのままホームランが打てるバット!! 妖怪バット……!!」

掲げたバットが血の色の夕陽に映える。

鬼太郎の声「その日から、男は妖怪バットでホームランを打ち続けた。来る日も、

来る日も、来る日も……」

真っ赤な夕焼けを背景に、バッターボックスで悪魔のようにバットを振り続け、打ち続ける男のシルエット。

アナウンサーの興奮した声が重なる。

「ホームラン！　ホームラン！　はいったーっ」「満塁ホームランだーっ」

「でたーっ。サヨナラホームラン！」

観客の熱狂的な興奮が潮のように響く。

輝かしい栄光のなか、やめたくてもやめられず、永遠に続くかのような狂気のバッティング。

男のシルエットが、しだいに骸骨に変わっていく……。

そして、最後に夕焼けが血に変わるイメージ。遠い、遠いところで絶叫がこだまする……。

2　ラーメン屋・屋台

話し終える鬼太郎。

ラーメンを食べる手を止めて聞いていたねずみ男、猫娘。目玉の親父。

そして、ラーメン屋の息子の三太郎。
目を丸く見開き、話にのめりこんでいた。
ねずみ男「それで？　どうなっちまったんだ？　その男」
鬼太郎「わからない。そのあと誰も彼を見てないからね」
目玉の親父「妖怪バットに魂を吸い取られてしまったのかもしれん」
猫　娘「魂を……」
と、ナイター中継の音が聞こえてくる。
アナの声「興奮の開幕ゲームも最終回。打ったーっ。はいったー！　逆転ホームラン！」
ラーメン屋の親父（三太郎の父）が、ほかの客と一緒に、液晶テレビのナイターに夢中になっている。
猫　娘「だけど、わかんないなあ。野球ねえ」
目玉の親父「人間はどうして、棒っきれで球をたたくことに、そんなに夢中になるんじゃろうのう」
鬼太郎「さあ……」
三太郎、いまかいまかと口をはさむ機会を待っていたが、
三太郎「ねえ！　ねえねえ！　その妖怪バットって、誰でも必ずホームランが打て

るの？」

みな、子供が聞いていると思わなかったので、ちょっと驚く。

三太郎「そのバットちょうだい！　ぼく、一度でいいからホームランを打ってみたいの！」

鬼太郎「だめだよ。あのバットは」

三太郎「ホームラン打てたら、死んでもいいよ！」

目玉の親父「やれやれ」

鬼太郎「三太郎君といったっけ。どうしてもホームランを打ちたいなら、やっぱり練習するしかないんじゃないかなあ」

お代を置いて帰っていく鬼太郎たち。

口をとがらせ、見送る三太郎。

三太郎「練習？　そんなの、めんどクサイよ……」

一方、企みにニンマリするねずみ男。

ねずみ男「なるほど。妖怪バットね……」

3　グラウンド

グラウンドで少年野球チームが試合中だ。
だらけて覇気のない『チョベリバ・ブータレーズ』のナイン。ファーストであくびしている肥満の光太。センターでゲームボーイをしている眼鏡の洋。ライトの三太郎にボールが飛んでくる。

純（ピッチャー）「いったぞ！　三太郎」
三太郎「はあーい」
三太郎、両手をあげて捕球のしぐさをしながら、右へ左へふらふらしていたが、結局、両手をあげてバンザイのポーズのまま、ボールはその目の前にポトンと落ちる。エラーだ。
相手チーム・二丁目ファイアーズのランナーが次々とホームインする。
純「なにやってんだよー。三太郎ーっ！」
ファイアーズのナイン「ヘッタクソーッ」
画面、ワイプし、今度はバッターボックスに立っている三太郎。
ピッチャーが球を投げる。
ボールがミットにおさまったただいぶあとに、バットを振る三太郎。
ため息をつくブータレーズナイン。
次の二球目も同じだ。空振り。

三球目。尻餅をついて転ぶ三太郎。ものの見事な三振だ。
審判係「ストラーイック。三振。ゲームセットーッ」
スコアボードは『25対0』でブータレーズの完敗だ。
ファイアーズA「また0点かよ、チョベリバ・ブータレーズ！」
ファイアーズB「もう99連敗じゃん」
ファイアーズC「ドヘボ軍団！」
ファイアーズA「明日、負けたら解散だってな」
ファイアーズA・B「ブーブーブータレーズ！」
ファイアーズ一同「はははは！」
去っていく。
純「くっそーっ!!」
ブータレーズのなかで一人だけシッカリしていそうな純。
三太郎「(頭をかき、照れ笑いでダグアウトに戻っている）へへー、ごめぇん」
純「三太郎！　おまえのせいだよ」
三太郎「でも、ぼく、わざと三振したわけじゃ……」
純「おまえ、99試合やって、バットにボールが当たったこと一度もなかったじゃないか！」

洋　「そうだよ！　一度もだ！」
光　太「練習もサボってばっかだし」
純　「おまえは、もう明日の試合も、来なくていいよ」
三太郎「ええっ……？」
行ってしまう少年たち。
光　太「あーあ、明日で解散か……」
洋　「一度くらい勝ちたかったなあ……」
三太郎、みんなを見送ってがっくり。

4　街

うなだれて歩く三太郎。
三太郎「妖怪バットがあればな……ぼくだって」
すると、ねずみ男が必死できょろきょろしている。
ねずみ男「4丁目……4丁目……」
三太郎「……何してるの？」
ねずみ男「おう。三太郎。4丁目って、このへんか？」

三太郎「この街には3丁目までしかないよ」

ねずみ男「馬鹿ったれ！　4丁目4番地の角を4回曲がるのよ。そこにあの妖怪バットがあるらしいんだ！」

三太郎「妖怪バットが?!」

ねずみ男「4丁目……」

　ねずみ男と一緒にきょろきょろ探しだす三太郎。

三太郎「4番地……」

　夕陽があたりを不思議な色に染めている。

　ボウッと『4丁目4番地』の標識が浮かびでるように現れる。

　目をみはるねずみ男と三太郎。

ねずみ男「4丁目……!!」

三太郎「4番地……!!」

ねずみ男「こ、この角を4回曲がるんだ！」

　ねずみ男、三太郎、さっそく角を曲がる。

三太郎・ねずみ男「1回」

　なぜか『4丁目4番地』と標識のある同じ角にでる。

三太郎「なんで？　おんなじとこにでた」

また同じところにでる。

三太郎「またた。またおんなじとこに！」

角を曲がる二人。

どきどきしながら曲がるねずみ男と三太郎。

ねずみ男・三太郎「これで4回だ……」

すると不思議。

なぜか、空間がぼんやりゆがみ、住宅街のなかに墓場に向かって一本の道がのびている。

三太郎・ねずみ男「……!!」

ドクロのような模様の入った枯れ木が両側に並んでいる。正面に血の色の夕陽が沈んでいくのが見えている。

びびる三太郎とねずみ男。

三太郎「い、行くの？　ほんとに……」

ねずみ男、いち早く三太郎を前に押しだし、

ねずみ男「二人で手を組もうじゃないか。妖怪バットを手にいれてひと儲けするんだ！」

三太郎を盾にして墓場の奥へ進むねずみ男。

ドクロの木が、痩せ衰えた顔のなかの黒い目をふたりに向けているように見える。

三太郎「ぼ、ぼく、やだよ。帰る」
ねずみ男「妖怪バットが欲しいんだろう！」
三太郎「もう、いらないよ」

そのとき、墓場のなかから、たくさんの枯れ木がまるで手のように出てきて、二人にゆらゆら手をのばしてくる。

ねずみ男・三太郎「ワアアアアッ!!」

二人に襲いかかってくる枯れ木。
地面の中からのびた手が、ねずみ男と三太郎の足をつかみ、地中にひきずりこんでいく。

ねずみ男・三太郎「ワアアアッ！」

ずぶずぶ埋まっていく三太郎。

ねずみ男「な、なにやってんだ！　ドジ！」

頭まで埋まった三太郎、必死で地中から手を出す。ひっぱるねずみ男。
地面がもくもくと動き、三太郎とともに、地中から棺桶がせり出してきてフタがあいてしまった。骸骨が眠っている。

ねずみ男・三太郎「ワアアアッ!!」
いち早く逃げ出してしまうねずみ男。
三太郎も逃げようとしたが、骸骨が抱いていた妖怪バットがコロンと転がり出た。
三太郎「……!!」
あまりの恐ろしさに、躊躇するが、エイッと目をつぶってそのバットを拾うと、ねずみ男を追って一目散に逃げ出す。

5 グラウンド・全景

『チョベリバ・ブータレーズ』が練習している。
純「今日が最後の試合か……」
監督のユニフォームを着たねずみ男がメガホンを振って近づいていく。
ねずみ男「オラオラオラ! チョベリバ・ブータレーズ、ビシッと練習せんかい。ビシッと」
純「誰だ。おまえ」
ねずみ男「たったいま、おまえたちの監督に就任したねずみ男様だ」

純・光太「監督?」
ねずみ男「今日からすべての試合に勝たせてやる。(振り向いて)ブータレーズの切り札だ」
物陰からソッと顔を出す三太郎。
洋「三太郎!」
ねずみ男「俺様のコーチで、三太郎はたった一夜でホームランバッターに生まれ変わった」
純「三太郎がホームランバッター?」
爆笑するナイン。
純「今まで一度もバットに当たったことないんだぜ」
光　太「あと百万年練習したってホームランなんか打てっこないよ」
三太郎、逃げ出してしまう。
ねずみ男「アッ。待て! コラッ」
ねずみ男、とっつかまえてヒソヒソと、
三太郎「や、やっぱり、やだよ、ぼく……」
ねずみ男「なにびびってんだよ!」
妖怪バットを使ってみたいが、怖くてたまらないのだ。

三太郎「これ使ったら、きっと魂を吸い取られちゃうんだ……」

ねずみ男「鬼太郎の言うことなんか、嘘っぱちさ！　あいつの舌は、でたらめの塊でできてんだぞ！　これから二人でたんとラクしようってときになんで！」

そのとき、二丁目ファイアーズの面々がやってきた。

ファイアーズA「試合に来てやったぞ。ドヘボ軍団！」

ファイアーズB「とっとと負けて、解散しなよ」

ファイアーズA「ブーブーブータレーズ！」

「ははは」という、ファイアーズの笑い声。悔しいが、うつむくしかないブータレーズナインの顔。それらが、三太郎を刺激する。

ようし、という気になっていく三太郎。

三太郎「ぼくに打たせて！」

純たち「ええっ？」

三太郎「約束するよ！　絶対にホームラン、うってみせる！」

ねずみ男「よしきた！　そーこなくちゃ！」

「はははは」と爆笑するファイアーズ。

ファイアーズA「三振三太郎がホームランだって？」

ブータレーズの面々、あきらめて……

純　　「勝手にしろよ」
三太郎「うん！」
ファイアーズＡ「後ろ向きに投げたって三振だ」
　　ファイアーズＡがマウンドで構える。
　　三太郎、どきどきしながら、妖怪バットを握り、見つめて祈る。
三太郎Ｍ「お願い……！」
　　バッターボックスに入る。緊張しているのでピッチャーに背中を向けて
　　構えてしまう。
純　　「なにしてんだよ！　逆だろ！」
ファイアーズ一同「ははは！」
ファイアーズＡ「ほーら」
　　ファイアーズＡ、ふざけて投げる。
　　三太郎、歯をくいしばり、目をつぶって、必死でバットを振る。
　　バットがボールに当たった。
　　次の瞬間。
　　奇跡が起こる。ジェットコースターの勢いでボールが飛んでいく。
　　グラウンドを越え、屋根を越えて、空のかなたに見えなくなってしまう。

呆然となるブータレーズ・ナイン。
呆然となるファイアーズ・ナイン。
アゴがたれさがる。
そして呆然となる三太郎。
しばらく誰ひとり、声もなかったが……

ねずみ男「ホームラン！　ホームランだ！　見たか三太郎！　俺の言ったとおりだろう?!」

ねずみ男に叩かれ、ハッとわれに返る三太郎。

三太郎「……ぼく……ぼく打ったの？　ホームラン……！」

躍りあがる三太郎。

三太郎「やった！　やった！　やったーっ」

×　×　×

三太郎がベースを一周している間に……

ねずみ男「(ブータレーズナインに) 打って打って打ちまくれ！　このバットがあれば、百本だって千本だって、ホームランが打てるんだ！」

純　「俺にも貸して！」

洋　「ぼくにも！」

光　太「貸してーっ！」
　あわててベンチに戻ってくる三太郎だが、手をのばしても、妖怪バット
　はもう三太郎には届かない。
三太郎「……！」

×　　×　　×

妖怪バットで打ちまくるブータレーズ。
純がうつ。
洋が打つ。
光太がうつ。
きりきりまいのファイアーズ。
ザマミロという顔で喜ぶブータレーズ。
結局、試合は７回までで『１０１対３５』でブータレーズが勝つ。
ブータレーズの歓喜の輪。
純「やったーっ！　やったぞ！」
三太郎「……!!　（嬉しいが複雑）」
洋「ぼくたち勝ったんだ！」
光　太「ばんざあぁーい」

ねずみ男「すしだ！　ステーキだ！　しゃぶしゃぶだーっ。俺におごれーっ」

6　街

鬼太郎と目玉の親父が、街を散歩していると、オーロラビジョンが、ニュースを映し出している。

アナウンス「これがいま話題のミラクル少年野球チーム・チョベリバ・ブータレーズです。出る試合、出る試合、ホームランで大量得点。まさにミラクル。奇跡のニュー・スター誕生です！」

鬼太郎「父さん！　あれは！　妖怪バット……！」

目玉の親父「なんとな！」

レポーター「こちらでは、ブータレーズの記者会見が行われています」

オーロラビジョンはブータレーズの記者会見を映し出す。ねずみ男が金屏風の前にしゃしゃりでて、

鬼太郎「ねずみ男！」

目玉の親父「またしてもやつのしわざか！」

ねずみ男「はいはい。並んで！　並んで！　ブータレーズのサインが欲しかったら、

ひとり35円だ！　あ。そこのカメラさん！　俺様のアップをとってくれなくちゃ」

スカウト「頼むよ。みんな。将来は、うちの球団に入ってくれるよね？」

プロ野球の監督「いや！　うちだ！」

プロ野球の監督「ぜひわがチームに！」

ねずみ男「契約金しだいで、話にのりますよ」

フラッシュの洪水を浴びるブータレーズ。

みんな、得意満面だ。三太郎をのぞいて。

あっけにとられて見つめ続けている鬼太郎たち。

7　記者会見場・廊下

洋「（雑誌の表紙）みて！　ぼくたちの特集だよ！」

光太「ぼくたちコマーシャルにも出るんだ！」

純「俺たちスーパースターだ！」

一同「イエイッ」

三太郎「ねえ。ぼくのバット……いつ返してくれるの？」

純　「（純が持っている）いいじゃん。これはもうみんなのものだよ。なっ」
光　太「そうだよ！」
ナイン、更衣室に入っていく。
ガックリと廊下に残る三太郎。
鬼太郎が近づく。
鬼太郎「三太郎君……」
三太郎「あ……鬼太郎さん！」
鬼太郎「あのバットは人間が使うものじゃない。このままじゃ、たいへんなことになるよ」
三太郎「たいへんなこと……？」
鬼太郎「みんな、少しずつ、魂を吸い取られているんだ」
三太郎「えっ!!」
鬼太郎「ごらん」
更衣室のみんなをのぞく。
ブータレーズのみんなが鏡に映っているのを見て、アッ！　と声をのむ三太郎。
鏡のなかのナインの顔は、青白く、幽霊と化している。

光　太「だけどさあ、最近、なんか疲れない？」
純　「おまえも？」
洋　「スタ―ってくたびれるんだね」
　　自分たちは気づかないのだ。
三太郎「……!!」
鬼太郎「もうじき、みんな、あの墓場で眠ることになってしまう」
三太郎「そんな！」
　　三太郎、更衣室に飛び込んでいく。
三太郎「ねえ！　みんな！　そのバットを鬼太郎さんに返して！」
純　「ああん？」
三太郎「このまま使ってたら、バットに魂をとられちゃうんだ！」
光　太「ばっかばかしい」
ねずみ男「(来て）鬼太郎！　よけいなことを言いにきたんじゃないだろうな！」
鬼太郎「ねずみ男、いい加減にしろよ」
ねずみ男「このバットは絶対に渡さないぞ！　取り返したかったら正々堂々、試合でも申し込むんだな」
鬼太郎「試合を？」

8

4丁目4番地墓場

純　　「面白い！　ぼく、妖怪と試合してみたいな！」
三太郎「そ、そんなこと言ったら、バチが当たるよ！」
純　　「だって負けるわけないよ！　このバットがあるんだ！」
ねずみ男「そうとも！　万が一、負けたら、魂をやったっていいよなー」
光　太「いっくらでもやるよー」
ブータレーズ一同「はははは」
鬼太郎「……」
三太郎「知らないよ！　そんなこと言って！」
ねずみ男「試合は今夜でどうだ？」
鬼太郎「……。ああ」
　帰りぎわにブータレーズを振り向く鬼太郎。
鬼太郎「ほんとうにいいんだね。負けたら魂をもらっても」
　鬼太郎の目に迫力。
　一瞬、怖くなるブータレーズ。

恐ろしい真夜中の墓場だ。
白い枯れ木が骸骨のように見えている。
おそるおそるやってくる三太郎たちブータレーズの面々。
光　太「ほんとうに、こんなとこでやるの？　試合……」
ねずみ男「俺たちはスター軍団だ！　いまさらビビるなよ」
純　「びびってなんか……」
泣きそうな三太郎。
三太郎「ぼくのせいだ……もし、みんなが魂をとられちゃったら……」
純　「縁起でもないこと言うなよ！」
ねずみ男「そうとも！　俺たちにゃあ、これがある（妖怪バット）」
そのとき、真っ暗ななかに４つの火の玉が現れる。
少年たち「……!!」
４つの火の玉はそれぞれ１、２、３塁とホームベースの位置の上にスッとともる。
ベースを照らしているのだ。
ロアングリとなる少年たち。
その４つの火の玉に照らされて、マウンド上にいる鬼太郎が浮かびあがっ

た。

三太郎「鬼太郎さんがピッチャー……！」

鬼太郎「何年ぶりかなあ。ボールにさわるのは……」

　ぽーんとボールをもてあそぼうとして、ぎこちなく、落とす。

鬼太郎「おっと」

猫　娘「ねえ。あたし、野球って、全然わかんないんだけど。これでいいの？」

　ホームベース上に座布団を敷き、ねそべって猫のしぐさで手をなめている。

鬼太郎「まあ、いいんじゃないかな」

　一塁ベースの上には蓮の葉が浮いており、その上に雨降り小僧が奇妙な目をして座っている。

　二塁上であずきをといでいる小豆とぎ。

小豆とぎ「あずきとごうか、人取って喰おうか……シャキシャキ」

　ショートで小豆を測っている小豆はかり。

小豆はかり「あずきはかろか、人取って喰おうか……シャリシャリ……」

　ブータレーズたち、目がテンになる。

純　「なんだあれ……」

声　「ひっひっひっ。子供の魂がたくさん吸えるってえ話は、どうやら本当らしいな」

ゴゴゴッと火柱が走って輪入道が三塁上に登場する。

縮みあがる少年たち。

鬼太郎「さあ、始めようか」

声　「プレイボールといきましょう」

一同の背後に、巨大な丸形の妖怪がヌーッと現れた。目が口がたくさんついてる。（原作参照）

巨大な球妖怪「わたしが審判よォォォ」

三太郎「ぎえええーっ!!」

審　判「誰が一番に死にたいの？　……おっと。違ったわ。誰が一番先にバッターになるの？」

妖怪たち「ひっひっひっひ……」

妖怪たち「ひっひっひっひ……」

すっかりびびってしまう少年たち。

光　太「い、いやだよーっ、ぼく」

純　「かっとばしてやる！　このバットで！」

純、バッターボックスに立つ。

鬼太郎「いくよ」

鬼太郎、投球する。

なんというヘロヘロ球だろう。

妖怪バットで猛然とスイングする純。

純「ホームラン、いただきだっ!!」

ところが、空振りだ！

純「……!!」

ブータレーズ一同「……!!」

三太郎「なんで？」

純「……!!」

鬼太郎「悪いけど、ぼくたち相手じゃあ、妖怪バットはきかないんだ」

ブータレーズ一同「……!!」

純「そんな……」

ブータレーズ一同に衝撃が走る。

奈落の底に落ちるがごとくのブータレーズ。

投げる鬼太郎。

純、必死で打つ。

ボールはゴロで小豆とぎと小豆はかりの間に飛ぶ。

小豆とぎ「あずきとごうか、人取って喰おうか……シャキシャキ」

小豆はかり「小豆はかろか、人取って喰おうか……シャリシャリ」

全くボールに関心がない二人。ボールは二人の間にぽとんと落ちる。

光　太「いけ！　いまのうちだーっ」

走る純、一塁を蹴って、二塁へ。

そのときだ。突然、一塁と二塁の間の土中から、畑怨霊が、天をつく勢いで現れてきた。

純「うわあああーっ!!」

畑怨霊、舌をのばして純を威嚇する。

立ちすくむ純に、ボールを拾った鬼太郎がタッチする。

審　判「はあい、アウトよォォォ」

汗ジトになる三太郎はじめブータレーズ一同。

×　　×　　×

以後、珍プレーが続出する。

鬼太郎がへろへろとボールを投げる。

光太が打つ。

ボテボテのゴロが飛ぶが、誰もとろうとしないので、ボールはレフトへ。

外野のヌリカベが一生懸命走るが、遅い。

ヌリカベ「ヌーリーカーベー」

一塁に達した光太。

審　判「せえええふ」

しかし雨降り小僧が、一塁にだけ雨を降らせており、光太はビショビショになってしまう。

次に洋が打つと、外野の雷神、風神が暴れて、すごい風で、ボールをもどしてしまう。

ボールは小豆とぎの枡の中に飛び込んで、

審　判「あうととぉぉぉぉ」

妖怪チームは打つ方もすごい。

化け草履が、ものすごい勢いで、空振りする。ゴウゴウと風が起こって、あたりの木々は根元から飛んでいく。

ピッチャー純が、傘化けに投球しようとしてギョッとなる。

傘化けが、純に変身したのだ。

純　「わあぁーっ!!」
　　思わずボールを握りしめてしまう。
目玉の親父「痛い！　痛い！　何をするんじゃ！」
　　ボールではなく、目玉の親父だった！
純　「ワアアアッ!!　ボールがしゃべったーっ」
　　思わず、目玉の親父を投球してしまう純。
　　傘化けは傘に戻り、飛んできた目玉の親父を広げた傘の上にひょいとのせ、親父を転がす。
　　要するに染太郎・染之助状態だ。
傘化け「おおーっととととと！」
目玉の親父「アー。キモチええ。かゆいとこにちょうどいいぞい」
鬼太郎「とうさん！　（大笑い）」
砂かけ婆「いいぞ、傘化け！」
　　見物に来ている天井なめ、呼ぶ子、油すまし、猫又たちも拍手喝采。
　　ただただ驚くばかりで唖然となっている三太郎たち。
　　こんなふうで、ヘンテコな試合はどちらも点が入らない。（チョークが勝手に動いて、黒板に0を書いていく）

スコアボードに0の行列が入っていくのと珍プレーとが○Lして描写されていく。
純のいい当たりを、ヌリカベが阻止してしまう。
盗塁しようとした洋の背中におぶさって石になってしまう子なき爺（守備はセンター）。

子なき爺「悪いのう、しぇしぇしぇしぇ」
一方、ブータレーズナインはこれまで見せたことのない必死のがんばりプレーをする。

光　太「このままじゃ、魂とられちゃうよ！」

純　　「がんばるんだ！」
三太郎が一生懸命、走ってボールを追う。
転んでも、ボールを離さない光太。
ドロんこになって守備する洋。
歯をくいしばって妖怪のホームインを阻止する純と光太。
三太郎は相変わらずものの見事に三振するが、顔つきだけは猛然と一生懸命だ。
バッティングした純はとても間にあわないのに、猛然とヘッドスライディ

ングしてアウトになる。
スコアボードはとっくに9回を過ぎ、18回をすぎても双方、点が入らない。
しだいに息ぎれしていくブータレーズ。
しかし妖怪たちは元気だ。
鬼太郎がバッティングすると、ボールは猛烈な勢いで地面にもぐっていき、また飛び出してきたときは、ちょうど、ひっくり返った三太郎の腹の上にすぽんと落ちる。
審　判「あうとぉぉぉ」
一反木綿「おいどんが打つでごわす」
一反木綿はバッティングしようにも、体が柔らかすぎて、バッティングができず、ボールとからまって倒れてしまう。
審　判「あうとぉぉぉ」
いまだ双方無得点のまま28回裏に入ったときだ。
猫娘がバッターボックスに立つ。
猫　娘「えーと。どうやって打つんだっけ」
純がくたびれきった体に必死の根性を入れて投げる。

ねずみ男が、猫娘のすそをひっぱった。
ねずみ男「頼む。三振してくれ！」
猫　娘「なにすんのよォ!!」
　猫娘、怒りのターンをした。その瞬間、ねずみ男は腰をひねり、ものすごい勢いで猫娘のバットにボールが当たり、ボールは砕け散って、半分が、遠く彼方に飛んでいく。
妖怪一同「……?!!」
ブータレーズ一同「……？」
　呆然となる一同。
ねずみ男「ま、まさ……」
審　判「ほうむらあああーん……」
　スコアボードには1／2点が書き込まれる。ついに妖怪チームに点が入ったのだ！
砂かけ婆「どうやら妖怪チームの勝ちのようじゃ」
ねずみ男「待ってくれー！　1／2点じゃ、まだ勝ちじゃない！　あと一回！　あと一回だけ攻撃させてくれ！　そこで1点入ったら、俺たちが勝ちだ！」
鬼太郎「なんでそうなるんだ？」

猫　娘「ヘンじゃないのよ」
目玉の親父「しかし確かに、1／2点では勝ちとはいえんかもしれん……」
ねずみ男「頼む！　お願い！」
三太郎「……」
鬼太郎「じゃ、あと一回だぞ」
　ついに最後の攻撃となる。
ねずみ男「お、俺がうつ！　うってみせるーっ」
　ふらふらのねずみ男、バットをヤケになって振るが、百回くらいその場で回ってしまい、目を回してひっくりかえる。腰をしたたかひねった。
審　判「わんあうとー」
　仏壇用のお鈴を鳴らして数える。
ねずみ男「こ、腰が……腰が……」
　純もあえなく三振する。
審　判「つうあうとー」
　お鈴がまたチンと鳴る。
砂かけ婆「さあ!!　あとひとりじゃ!!」
審　判「あとひとりで、この子たちの魂、いただけちゃうのね……」

妖怪たち「ひっひっひっ……」
妖怪たち「ひっひっひっひっ……」
最後のバッターは三太郎だ。
三太郎「ま、負けるもんか？」
三太郎が、疲労困憊している体を懸命に起こし、バッターボックスに立つ。
構える三太郎。
純　「三太郎！　がんばれ！」
光　太「なんでもいいから打ってーっ」
洋　「頼むーっ」
ねずみ男「おまえだけが頼りだーっ」
三太郎、仲間の応援を受けて勇気をふりしぼる。
鬼太郎「いくよ。三太郎君」
三太郎、歯をくいしばる。
鬼太郎、投球する。
三太郎、懸命にバットを振る。
空振りする。

審　判「すとらいくー」
三太郎「……!!」
　　泣きそうになる三太郎。
　　鬼太郎、二球目を投げる。
　　三太郎、おもいっきりスイング。
　　しかし、また空振りだ。
雨降り小僧「あと一球……」
純たち「三太郎ーっ!!」
　「三太郎ーっ!!」
　　三太郎、渾身の力をこめて、
　　鬼太郎、最後の球を投げる。
　　三太郎、振った。
　　ものすごいスイングだ。
　　風をきり、空をきる。
　　アッ!!　と息をのむブータレーズ。
　　アッ!!　と息をのむ妖怪たち。
三太郎「……!!」

三太郎のスイングが終わった。
ボールはキャッチャーミットに飛び込んでいた。
三振だ!!
三太郎「……!!」
ブータレーズ「……!!」
鬼太郎たち「……!!」
シーンと静まりかえる場内。
審　判「あうとーっ!!!!」
三太郎「ア、アウト……」
待ってましたとばかりに、いろいろな妖怪が姿を現した。
輪入道「勝ったぞ！　われわれが」
火　車「やっと魂がいただける」
あずきばばあ「ありがたいねえ……」
輪入道「さあ！」
白うねり「クウクウ……！」
小豆とぎ・小豆はかり「さあ……」
雨降り小僧「さあ……」

少年たちを囲み、その輪を縮めてくる妖怪たち。
縮み上がる少年たち。
三太郎「待って！　やめて！　やめて！」
少年たちの前に飛び込む三太郎。
鬼太郎「……」
三太郎「ぼくのせいだもん……、ぼくが妖怪バットなんか欲しがったから……だからこんなことに……」
純「三太郎……」
三太郎「ぼくの魂をあげるよ。だからみんなを助けてあげて！　お願い！」
三太郎、涙を浮かべている。
そんな三太郎を、純たちは胸打たれて見てしまう。
純「……」
光太「……」
洋「……」
鬼太郎「三太郎君……」
輪入道「わかった。おまえの魂をとってやろう」
三太郎「……！　（覚悟して目を閉じる）」

輪入道が、三太郎に襲いかかった、そのときだ。

朝日のまぶしい日差しが墓場にさしこんだ。目を射抜かれる輪入道。

輪入道「ま、まぶしい」

妖怪たちはそれぞれ、まぶしくて、あわて、ひるんでしまう。

雨降り小僧「おお……」

審　判「いやーん」

妖怪たち、それぞれ、すたこらと去っていく。

輪入道、体がかゆくなって、

輪入道「だめだ。朝日をあびると、体が……」

子供たちのわきを通って帰っていく。

輪入道「命拾いしたな……」

にこにこして帰っていく妖怪もいる。

夜　行「まあいいわ。おまえらの魂なんぞ、どうせまずいしな」

子なき爺「いい運動になったわい」

あずきばばあ「おどかせて、楽しかったぞい。はっはっはっは」

去っていく妖怪たち。

残ったのは鬼太郎、目玉の親父、猫娘、砂かけ婆くらいだ。

ねずみ男は、腰をやられ、立てなくなっている。

ねずみ男「た、助かった……」

砂かけ婆「おまえの魂まで食べようなんて物好きがいるか！」

ぽかんとなったまま、へたりこんでいるブータレーズナイン。

目玉の親父「これで少しはこりたかの？」

三太郎「助かったの？　ぼくたち……」

鬼太郎「ちょっとこらしめすぎたかな？」

優しく微笑む鬼太郎。

鬼太郎「妖怪バットを返してくれるかい？」

純と三太郎たち、笑顔を見合わせて、鬼太郎に妖怪バットを返す。

ブータレーズの笑顔が三太郎を囲む。

純　「よかったな……」

三太郎「うん……」

朝日が美しく輝きだす。

洋　「でもさ、なんか楽しかった」

純　「ぼくもだよ」

洋　「一生懸命やっちゃった」

純　　「おもいっきり走ったよ」
三太郎「今日は最高だった！」
鬼太郎「こら、調子いいぞ」
　　笑顔はじけるブータレーズと三太郎。
　　鬼太郎たちも笑顔で……。

9　鬼太郎の家

　　後日。鬼太郎、猫娘、目玉の親父が集まっている。絆創膏と包帯でぐるぐるまきのねずみ男、腰にギプスをして横になっている。
猫　娘「へー。それじゃあれからブータレーズのみんな、仲良くやってんだ」
目玉の親父「三太郎君も少しはその、練習をするようになったのかな？」
ねずみ男「さあね。どうもあんまり変わってねーみてーだよ。また10連敗したとか」
猫　娘「あんたがコーチしてあげれば？（指圧する）」
ねずみ男「ワアアアッ!! もうあんな奴らはこりごりだ！　どうだ、鬼太郎、今度はおまえのマネージャーになってやるよ。ピッチャー鬼太郎を大リーグに売り込んでやっからさー」

鬼太郎「ぼくはもう、いいよ、野球は」

笑って窓から空を見やる鬼太郎。

鬼太郎「やっぱり野球は、人間がやるものさ」

三太郎に優しく思いをはせる。

10

グラウンド

野球をしている三太郎。

ヘタクソだが、みんなが笑って野球を楽しんでいる。

鬼太郎の声「人間の子供たちはなぜかみんな、心から野球が好きみたいだからね……」

純の声「おーい。いくぞーっ。三太郎」

三太郎「おーっ」

ブータレーズの笑顔。

三太郎のはちきれるような笑顔。

——おわり——